

原爆文学研究会報

第五九号

原爆文学研究会 二〇一九年一〇月

伝えていくことのはざままで

堀本 嘉子

一九四一年十二月七日、日曜日の朝、ハワイ・オアフ島の真珠湾が旧日本陸軍に襲撃された。太平洋戦争開戦の契機となったこの出来事は、ハワイに住む人々、世界中の人々に今も忘れられずに語り継がれている。この夏、私は人生初のハワイへ足を運んだ。かねてよりその地をこの目で見たかった私は、夫となった人を引き連れて真珠湾に旅行日程の一日を費やした。

真珠湾攻撃の際に沈没した戦艦のうち、引き揚げられなかった戦艦は二つ。そのうちのひとつ戦艦アリゾナと運命を共にした兵士たちは今も海底に沈んだまま保存され、戦艦の真上の海上に建てられた記念館は兵士たちの墓碑となつている。白く細長い長方形の建物は真ん中が凹み、両脇に向かつて上がるような形をしていた。凹んでいる部分は旧日本陸軍の襲撃によって壊滅状態に陥れられた当時の悲しみを、両端の持ち上がっていくような形はその後アメリカが日本に勝利した高揚感を表しているという。

パールハーバーツアーでは、米軍の船でアリゾナの近くまで行く。今年の夏は老朽化したアリゾナの修復工事中で、アリゾナ記念館の中に入ることは叶わなかったが、クルーズを終えてからは四つの博物館を回る事になった。展示を見ると Why? の文字——なぜ、パールハーバーだったのか? なぜ、私たちがこのような目に合わなければならなかったのか?——という文言が繰り返し見て取れる。報復を日本にとり連帯が強固になった過程や、太平洋戦争開戦の必然性を訴える展示だ。展

示室の最後には、ひっそりと広島市の被爆者・佐々木禎子さんの折り鶴が展示されていた。広島平和記念公園にある原爆の子の像のモデルでもある広島の少女の「物語」は中学英語の主流な教科書（『NEW CROWN』（三省堂）、他）にも掲載されている。私自身も中学生時代に英語の授業で読んだ記憶があるし、アルバイト先の学習塾で教えていた生徒が「定期考査の範囲なんだ」と「The Story of Sadako」を読んでいるところを何度も目撃したことがある。佐々木禎子をめぐる物語は今年撮影が始まるハリウッド映画「One Thousand Paper Cranes」が公開されれば、その語られ方が改めて俎上に載せられることだろう。

二つの博物館を見終わってからバスで移動した先には戦艦ミズーリが待っていた。一九四五年九月二日東京湾へやってきた実物の戦艦は退役後、真珠湾に戻り一九九九年から記念艦として一般公開されている。八月三十一日を予定していた降伏文書の調印式は台風の影響で一度延期されたものの、マッカーサー元帥指揮のもとこの戦艦ミズーリの船上で執り行われた。この波乱の数日間に材を取り、久生十蘭は小説『たいこん』を執筆している。十蘭の小説は調印式そのものよりも、その周辺の出来事や大人達の動静を少女の視点を借りて追うという構成をとっていて、あの日の出来事を小説に落とし込む手法として興味深いものがある。ミズーリ上で展示された降伏文書のレプリカは、つい先日書かれたような真新しさを感じさせた。

今年五月、アメリカのワシントン州リッチランドに留学していた福岡県の高松三年生古賀野々華さんが発信した「きのこ雲」に関するビデオメッセージがネット上で話題になった。リッチランドは長崎原爆の原料を作ったことでも知られるが、留学先の高校の校章がきのこ雲を使った

デザインであったことや、授業で同級生の「原爆のおかげで戦争は終わった」と発言に疑問を持ったことが述べられる。二〇一九年現在においても日本国内とアメリカ国内で行われる「教育」の違いを実感させられる報告である。

二〇二〇年は大学入試新テストの導入、二〇二二年は高等学校教科書が一新される年だ。中でも国語科の必修教科目の改訂は「実用文」と「文学」の定義からその中身まで問題点が多々指摘されている。現在、都内高等学校で国語の教員として勤務する私が懸念するのは、その中で「原爆文学」という領域がどこまで教科書の中で残り、現場の教員の手で教えられていくのかということである。広島・長崎で開催される平和記念式典、八月に行われる登校日を経験しない子供たちは学校の教科書や平和学習を通してその記憶を受け渡されてきた。もちろん、教科書だけが全てではない。しかし、その機会をどれだけだけの学校と教師が獲得するかは、教科書に何が掲載されているのかということが大いに関係してくるだろう。第五十九回原爆文学研究会では、研究発表の中で京都府の公立小学校で行われた南方特別留學生被爆者に関する授業を取り上げた新聞記事が資料に挙げられていた。糸口を見つけ出し戦争の記憶を受け渡していく試みが各都道府県で現在でも行われている事例を垣間見たように感じた。

私たちはどこからきて、どこへゆくのか。どのように学び、どのように伝えてゆくのか。教科書のなかの「原爆文学」のゆくえに今後も注目していきたい。

第五九回 原爆文学研究会報告

二〇一九年七月二十七日(土)・二十八日(日)に、広島大学東千田キャンパスにて、第五九回研究会を開催しました。今回は二日間開催で、初日は遠田憲成さんの研究発表と、原爆小頭症に関するTVDキュメンタ



ら「胎内被爆小頭児を支えて」の上映を行い、評論家の東琢磨さん、毎日放送の大牟田聡さん、中国放送の平尾直政さんが報告を行った後に、ディスカッションを行いました。広島放送局である中国放送というローカルなマスメディアの可能性や、原爆小頭症の患者とその家族や支援者によってはじまった「きのこ会」による記憶の継承、また事実を「記録」することと「作品」化することの違いなど白熱した議論が行われ、充実したセッションとなりました。

二日目は平野裕次さんと小林朋子さんによる研究発表と、七回目の再読企画として青来有一『爆心』を取り上げ、楠田剛士さん、畑中佳恵さん、四條知恵さんの報告の後、議論を行いました。平野さんの発表「被

リーについてのセッションが行われました。遠田さんの発表「原民喜『原爆以後』再考察——『鎮魂歌』を中心に——」では、原民喜の『原爆以後』、特に「鎮魂歌」を、原の初期作品からみられる「念想」という概念を基に丁寧な分析し、原の初期作品から『原爆以後』への創作方法に通底するものや変化を丁寧に追う必要性を提起されました。セッション「TVDキュメンタリーと原爆小頭症」では、まず企画者の山本昭宏さんから趣旨説明が行われ、中国放送が二〇一七年に発表した『原爆が遺した子

爆した南方特別留学生と戦後の日本社会——その記憶の形成の史的展開について——」では、広島で被爆した南方特別留学生が戦後の日本社会においてどのように記憶され、想起されてきたのかの歴史的展開と、現状の課題を報告されました。小林さんの発表「“Unspeakable Thoughts Unspoken”を描くこと——『父と暮せば』と『ピラヴド』に見る「近代的生」——」では、井上ひさしの『父と暮せば』とトニ・モリスンの『ピラヴド』を対比研究の立場から、両者に共通する「語りの手法」から出発し、どのように両者が近代を再考するように迫り、人種主義の問題に抗するように働きかけているかを分析し、両テキストの重要性を述べられました。「原爆文学」再読7——青来有一『爆心』では、まず企画者の楠田さんから『爆心』を再読企画で取り上げる意義と先行評・先行論の整理が行われ、畑中さんは単行本のレイアウトや短編の収録順から読み取れる問題や、近年の作者青来の動向を踏まえた論点を提起され、四條さんは『爆心』に収録された「虫」の分析を通して、歴史の記録に残らない空白部に迫ろうとする青来の記述の可能性を示されました。議論では『爆心』におけるセクシャリティ描写の意義や「原爆文学」における虫の表象にまで議論が展開し、『爆心』にとどまらず「原爆文学」におけるさまざまな論点に話が及ぶ、充実した再読企画となりました。

◇【二日目】研究発表

原民喜『原爆以後』再考察

「鎮魂歌」を中心に

遠田 憲成

原民喜は自らの作品を世に遺す際細心の注意を払っており、その結果いくつもの作品集が産まれた。私は現在修士論文提出に向けて、それら作品集を中心に分析を進めている。本発表ではその中でも『原爆以後』、



特に「鎮魂歌」に注目し、原の創作方法について考察を試みた。

原作品については度々原独自の視点というものが言及される。本発表ではその視点を、現実（原が実際に体験したであろう事柄）と、作品内で描かれる「念想」による描写（原が想像したであろう事柄）の二つに分割した。

特に「念想」という言葉は、原作品の中で初期作品から使用されるものであり、原の作品を分析する際には見落としてはならないものだと発表者は考える。発表者が分析する限りでは、「念想」は登場人物に想像を喚起するものであり、それそのものが想像ではない。したがって、「念想」がもたらす効果は原作品の中で共通のものであるが、その結果生じる想像は異なるものとなる。『原爆以後』においては、「鎮魂歌」以前、以後で想像するものの性質が変化している。その変化の過程をもたらし、ために、「鎮魂歌」という作品が『原爆以後』に配置されていると考えられる。「鎮魂歌」という作品単体を分析するのではなく、作品集という単位に着目することで、原作品の新たな側面をみる事ができた。

今回は主に作品集というものについて分析を行ったが、質疑応答後、改めて原民喜という作家本人についての分析をすすめる必要があると感じた。発表内では『三田文学』編集者時代の原民喜という点にも触れたのだが、作家・編集者それぞれで原の立場がどのように変わっていったのかについては今後調査を行っていく必要がある。また、原の被爆体験はもちろん作品に強く影響を与えている。既にいくつもの考察がなされてはいるが、作品単体で分析を行うのではなく、各作品を接続することで原の創作方法の変遷などがみえてくるのではないだろうか。今後も調査を続けていきたい。

◇セッション「TVDドキュメンタリーと原爆小頭症」

「TVDドキュメンタリーと原爆小頭症」 趣旨説明

山本 昭宏



「原爆小頭症とテレビドキュメンタリー」と題して、ドキュメンタリーの上映とアフタートークを開催した。上映した作品は、『原爆が遺した子ら…胎内被爆小頭児を支えて』（中国放送、二〇一七年）である。

企画に当って、次の二点に留意した。第一に原爆小頭症の問題、第二にテレビドキュメンタリーというメディア、である。これまで原爆文学研究会では、山代巴に関する報告などで、原爆小頭症の問題を間接的に扱ってきたが、正面から扱ったわけではない。また、テレビという放送メディアには、「残りにくい」という問題があり、なかなか手をつけにくいテーマだったと言える。これらを踏まえて、広島放送局が製作したテレビドキュメンタリーを対象に設定した。ドキュメンタリーの作り手の側の葛藤や、ジャーナリストによる「記録」の試み、そして原爆小頭症と戦後社会との関係がテーマになった。

アフタートークでは次の三人に口火を切っていただいた。一人目は、『原爆が遺した子ら』のディレクター、平尾直政氏である。平尾氏は、一九九〇年から原爆小頭症患者の取材を続けてこられた。平尾氏からは、ドキュメンタリー制作の背景について、詳細にコメントいただいた。二人目として東琢磨さんにお話いただいた。ドキュメンタリーが他の表現よりも「顔」を映し出せるのではないかという指摘や、「日本社会は

当事者にばかり語らせてきたのではないか」という問題提起があった。

三番目のコメントータは大牟田聡氏である。大牟田氏は、大牟田聡氏のご子息であり、なおかつ現役のジャーナリストである。双方の観点から、ドキュメンタリーに可能なこと、現場の制作者たちの苦悩やジレンマについて、コメントをいただいた。

全体討論では、ドキュメンタリーの背景、原爆小頭症患者の現在、ジャーナリストの倫理観、ドキュメンタリーというメディア文化の可能性について、活発な議論がなされた。

◇セッション「TVDドキュメンタリーと原爆小頭症」

報告① 広島の、ローカルな、テレビドキュメンタリー、ということ

東 琢磨



この時代、最も身近なメディアは長くテレビであり続けてきたはずだ。活字に追いつくうとしているまま、ネットに追いつかれようとしている感もあるが、それでも現在もテレビの占める存在は大きい。そうしたなかで、テレビ・ドキュメンタリーは放送が遅い時間帯になってしまっていることなどもあり、どこかそうした主流メディアのなかでも傍流のイメージがあると同時に、その気になれば、あるいはならなくとも見れてしまうものなのに、ふたたび見たいと思っても、映画以上に再会することが困難な「作品」ともなっている。

「ヒロシマ」や「原爆」といったテーマであれば、少なくとも広島に

住んでいる人間は、ごく身近なのに遠くもあるテレビ・ドキュメンタリーから多くの恩恵を受けてきている。そこからは、活字になっていない(だろう)ことばを聞き取り、やはり活字では(あるいはアニメでは)見ることのできない顔たちに、その表情に出会うことができる。それは、「作品」なのか「資料」なのか。「記録」なのか「証言」なのか。あるいはそうしたものすべてなのか。テレビであること、あるいはドキュメンタリーであること。その両方であること。その前提として映像とそうでないもののあいだの問いもあるだろう。(テレビ)ドキュメンタリーが撮影・記録・編集した対象とでもいべきものをどのように評価する以前に、あるいはそれだけではなく、テレビドキュメンタリーという「制度」のようなものは実のところは非常に輻輳・錯綜した問いを突き出してくるのだ。

広島の、ローカルの、テレビドキュメンタリーの作り手として感銘を受けたのが、平尾直政さんだった。なかでも、平尾さんが支援者であると同時にドキュメンタリーの「対象」として関わってきたのが原爆小頭症者および彼・彼女たちを取り巻く人たちだということは、テレビドキュメンタリーというフレーム自体への問いとも重なっているのかもしれない。誤解をおそれずにいえば、語ることでできない事態を語ることでできない当事者をどのように「記録」するかということだ。それは映像でしかできないのかもしれないし、また定点観測のような行為が可能ならローカルメディア関係者にしかできないことかもしれない。

さらにいえば、これまた誤解をおそれずにいえば、平尾さんを入口に(特にローカルな)テレビドキュメンタリーの重要性に多くの方々気づいていただき、アーカイブのアーカイブ、アーカイブのインデックスのようなものを志向する方向性をつくれないうかという意識もある。圧倒的な悲惨には、圧倒的に豊かな「語り」で対抗するしかない、のかもしれないし、そのために参照すべき多くの遺産にまだ私たちはじゆうぜんにはふれていないのだ。

◇セッション「TVドキュメンタリーと原爆小頭症」

報告② ジャーナリストの当事者性

——きのこ会と大牟田稔——

大牟田 稔



一九六五年に刊行された岩波新書『この世界の片隅で』(山代巴編)のなかで、中国放送の秋信利彦(一九三五～二〇一〇)が「風早晃治」名で発表した報告「IN UTER O」。そこで初めて原爆小頭症の存在が明らかにされた。

取材中、彼はある母親から静かに、しかし厳しい言葉を投げかけられた。

「あなた方は本を出してしまえば、それで終わりでしょう。しかし、私たち親子は、これからは世間の目にさらされて生き続けねばならないのです。その責任はどうしてくれるんですか」

秋信はその言葉を重く受け止め、編者の山代に相談した。山代は即座にこう答えたという。

「まず集まることよ」

こうして一九六五年六月、小頭症患者六人とその親が集まり、「きのこ会」が誕生した。会の名前は「きのこ雲の下で生まれた子供ではあるが、たとえ日陰であろうともきのこのような生命力をもつて育ってほしい」という父親のひとりの発案による。

事務局として秋信のほか、中国新聞記者だった筆者の父・大牟田稔(一九三〇～二〇〇一)、そして作家の文沢隆一(一九二八～)が会を支え

ることになった。いずれも『この世界の片隅で』の執筆者である。

ジャーナリストが当事者となり、きのこ会メンバーの盾になることには、同業者からの風当たりも強かっただろうことは容易に想像できる。彼らは会を支えることに徹し、自ら記事や番組にすることに對しても抑制的だった。取材者自身が事務局を務めた背景には、当時センサーシヨナルな報道が溢れていたこと、きのこ会を利用したいと目論む運動体が分裂と対立を繰り返していたことがある。

親が亡くなった今、きのこ会は兄弟姉妹や支援者によって支えられ、事務局は秋信の後輩である中国放送の平尾直政らが引き継いでいる。ジャーナリストが支えるという稀有な形をとったきのこ会は、取材者が個々の原爆被害者と向き合うことの意味を現在も問いかけている。

◇セッション「TVドキュメンタリーと原爆小頭症」

報告③ ヒロシマから

—— 伝えること、記録すること、守ること ——

平尾 直政

ひとりのジャーナリストが個人の立場で胎内被爆小頭症に苦しむ家族を探し出し一本のルポを発表した。そして社会的な支援もなく差別や偏見の目に苦しみ続けていた彼らの求めに応じて支援者となった。心無い取材者たちから家族を守る盾にもなった。自身で発掘したスクープであるにもかかわらず、他者とのけじめから彼は自分で記事にすることをやめた。被爆地ヒロシマの記者として、心の中には常に被害者家族の姿があった：「原爆が遺した子ら」はそんな番組です。主人公は一九七五年に行われた昭和天皇の記者会見で「原爆投下」について質問した記者、



たのでしよう。

アメリカによる原子爆弾の投下から七十四年。この十年間で八万人以上の被爆者が亡くなりました。一九四五年八月から始まる苦しみを語れる方は少なくなり、体験者から話を聴くという基本的な取材手法そのものが難しくなってきました。番組の登場人物もほとんどが故人となりました。主人公の秋信さんも二〇一〇年に亡くなり、新たに取材することはできません。それでもこの番組を制作することができたのは、先輩方が「素材」を残してしてくれたからです。被爆八十年、九十年、そして百年。その時、被爆者を直接取材することはできません。語ってくれるのは、保存された被爆資料や映像・音声などだけです。「記録」や「資料」からいかに人間ストーリーを浮かび上がらせることができるのか。アーカイブの整備は今後ますます重要性を増しますが、それと同じくらいアーカイブされた情報をどのように読み込み命を吹き込むかが残された私たちにとって大きな課題なのだと思います。

秋信利彦さんです。私は原爆小頭症問題のキーマンである秋信さんが現役時代に何度かインタビューを申し込んでいましたが、そのたびに断られていました。自分から語ることはなかった秋信さんが映像取材を受けてくれたのは晩年になってから。やはり「記録を残しておかなければ」という強い思いがあっ

被爆した南方特別留学生と戦後の日本社会

——その記憶の形成の史的展開について——

平野 裕次



本報告では、広島で被爆した南方特別留学生が戦後の日本社会においてどのように記憶され、表象されてきたのか、その史的展開を考察した。一九五〇年代半ば以降、広島大学において彼らの被爆状況の調査が進められ、京都と広島では墓碑が建立されるとともに遺族の来日・墓参が実現した。また、彼らが住んだ学生寮があった場所には「興南寮跡」碑が建立された。日本社会における被爆した南方特別留学生に関する記憶の原型はこの時期に形成され、その後の表象の展開を方向づけるものとなった。

八〇年代以降、被爆した南方特別留学生の広島訪問が相次ぎ、自身の被爆体験を語ることによって、その被爆実態の解明が進められた。また、文学や平和学習としての対象化も進行していった。こうして、九〇年代前半には南方特別留学生の被爆の事実が各種メディアで取り上げられ、被爆五〇年を迎えた九五年にはその表象の頂点を迎えた。

特に京都では、被爆死したサイド・オマールの物語が小学校の平和学習の対象として取り上げられてきた。その取り組みの一環として児童が作成した絵本『オマールさんを訪ねる旅』は、戦後の日本社会における被爆した南方特別留学生に関する表象が集約されていると言えるだろう。九五年以降、被爆した留学生や関係者の高齢化あるいは死去に伴い、日本社会におけるその記憶の風化が進みつつある。近年、被爆した南方

特別留学生の戦後の歩みを記した書籍の刊行が続くとともに、広島大学からは存命中の留学生に対して名誉博士号が授与された。二〇一九年四月には広島平和記念資料館本館がリニューアルオープンし、新たに設置された外国人被爆者をテーマとしたコーナーで被爆した南方特別留学生に関する展示をみる事ができる。こうしたなか、その記憶の継承が課題となっている。

“Unspeakable Thoughts Unspoken”を描く(1)

——『父と暮せば』と『ピラヴド』に見る「近代的生」——

小林 朋子



「対比」研究に支えられたアメリカ派比較文学は、確たる影響の証拠を見いだせないとしても、両文学作品の間に人類に共通する普遍的性質があると考える。本発表では井上ひさしの『父と暮せば』とト・モリスンの『ピラヴド』を「対比」することで、人類の文化に普遍的に存在する「語りの手法」について考察し、さらにその「語りの手法」によって、

それぞれの作家が描こうとした歴史的記憶に内在する「近代的生」と呼ぶうるものについても検証した。研究会で貴重な意見を賜った方々に感謝申し上げたい。

『父と暮せば』では「一人二役十幻術」という「劇場の機知」が見られるが、それらは二つ重ねられることで、堅牢な演劇的時空間となって、登場する人物の台詞を底から支えている。モリスンが、一九世紀アメリカ

力の奴隷制下で自身の娘を殺めた主人公セサの内面を『ビラヴド』で描き出すために使っているのも、この作劇法であったと考えられる。モリスンはこの小説において、現実の時間と空間を超越した「演劇的時空間」を創出し、現実世界ではもう二度と会うことの叶わない死者を、一人の肉体ある人物として作品内にあえて登場させるといふ「幻術」を使って、セサが抱えるトラウマの記憶を描き出そうとしている。

『父と暮せば』と『ビラヴド』は、その根本的なスタイルが、個人的な具体性に出発して、それを社会、国家、世界そして歴史にまで繋ごうとするものだ。ここには「奴隷制度」や「ヒロシマ」という言葉に閉じ込められた名前のある人間の体験した歴史上のあれこれを語り、そして記憶しなければならぬという両作家の信念が垣間見られる。さらに二つの作品は、近代資本主義の歪みをもたらした、人種主義の顕在化を考へるとき、地続きの物語となつて我々に近代とは何かを再考することを促すものでもある。資本主義的・人種的奴隷制を近代の始まりと捉え、そこに人種主義の病理を見るならば、近代奴隷制と太平洋戦争を題材にした『ビラヴド』と『父と暮せば』は、ポスト近代を生きる私たちが、未だ社会に内在する人種主義の問題に抗するために何をなすべきかの指針となり、また社会・政治的な動きを活気づけるための資源となる「文学的記録」である。

◇ 「原爆文学」再読7——青来有一『爆心』

報告① 青来有一『爆心』の読まれ方

楠田 剛士

長崎在住の作家青来有一は、最初の単行本『聖水』から近作「フェイクコメデイ」まで長崎原爆の記憶を小説に描き続けてきた。今日の原爆文学を考える上で重要な作家の一人だが、十分に読まれ論じられている



わけではない。青来の小説の問題と可能性を議論したいと考え、再読では『爆心』を取り上げることにした。

『爆心』は二〇〇五年から二〇〇六年にかけて雑誌に掲載され、二〇〇六年に単行本化、谷崎潤一郎賞と伊藤整文学賞を受賞した。二〇一〇年に文庫化とラジオドラマ化、一三年に映画化、一五年に翻訳出版、その他「鳥」「虫」がアンソロジーに収録された。このように『爆心』は青来の代表作として発表媒体を広げている。

先行評については、まず初出「虫」の合評が出た。単行本刊行後は谷崎賞の選評で高い評価を受けたが、個別の短篇が取り上げられることが多く、論じられる短篇にも偏りが見られる。また連載・出版が被爆六〇年という節目にあたり、文学賞受賞や映画化もあつて、作家が自作を語る機会は多かった。そこで繰り返されるのは、被爆地で記憶がよみがえる瞬間を描くために様々な語りの工夫を行っているというものである。先行評でもしばしば援用される作家の発言をどうとらえるかが、再読の一つのポイントになろう。

二〇一一年以降、『爆心』全体を論じる論文が出てくる。一三年の映画は「貝」と「鳥」が物語のベースになった。「貝」は先行評で取り上げられることが極端に少ないので、映画化はひとつの着眼点といえる。

二〇一五年にアメリカで出版された翻訳書にはカバーそでに内容紹介裏表紙に短評が載っており、大学教授や作家たちが青来の文章を高く評価している。その一人ジェイ・ルービンとは日本文学のアンソロジーを編む際に「虫」を選んでいる。そのルービンの選集を読んだ村上春樹による「虫」の紹介文が最近発表された。語りや性愛に注目した個々の短篇の分析も引き続き行われているが、トータルな『爆心』論、トータルな青来文学論がどのように可能か、今後の大きな課題である。

◇「原爆文学」再読7——青来有一『爆心』

報告② 青来有一『爆心』再読のために

畑中 佳恵



『爆心』（文藝春秋、二〇〇六年）には、長崎・浦上のクリシタン迫害や原爆被災をめぐる「記憶のよみがえり」が描かれている。日常語としては分かりやすく作品の説明としては分かりにくい、この作者自身による説明や念頭におきつつ、本報告では単行本の意匠や各短編の描写等から読み取れることを整理した。

まず、単行本カバーには厚い雲の写真が用いられ、爆心は肉眼で見定められない空中にあることが示唆されている。続く目次タイトルは円を描く配置であり、言語化されない中心に対して収録作品が周縁を成しているようにみえる。土地の記憶がそれ自体は捉えがたい虚でありながら、それに自身の虚を揺さぶられる周縁の人々によって感知され媒介される——そんな構図のもと、「具体的なイメージの連関にズレをとまなう物量を与え、捉えがたい何かのまわりを創出すること」が目論まれているのではないか。また、読者は様々な要素を読みとり関連付けることで周縁形成に参加することになるのではないかと、問題提起した。

読者が類似性を見出しうる要素は、例えば内壁に釘がびっしり打たれた納戸（「釘」）、被爆して足に刺さったガラス片（「虫」）、毛だらかのキウイ（「蜜」）、奥さんの陰部（「蜜」）など短編をまたいで、またデビュー作から最近作にまで散らばっている。それらに読者自身の身の回りの要素を隣接させることも可能だろう。

報告後半では、近年の作者が過去の作品群を批判的に乗り越えようとしていることにも触れ、意見交換を求めた。『爆心』以降のテーマは人

間一般の信仰の有り様へと力点が移され、さらには断片化された私小説的な手法への移行が試みられているようである。報告者は、長崎・浦上の記憶を特定の出来事と直結させて実体化することの危険性を指摘しつつ、それらと同じ土地をめぐる別の記憶と突合したり、他の土地の固有性をめぐる語りと関係づけたり……という多様な試みに開かれる可能性について述べた。青来氏の初期テーマには、未だ展開の余地が残されているのではないだろうか。

◇「原爆文学」再読7——青来有一『爆心』

報告③ 『爆心』 「虫」に寄せて

——歴史的出来事の空白をめぐる検討——

四條 知恵



歴史叙述に着目すると、一定の事象の隠蔽、排除が必ずそこに存在するという問題に目を向けざるをえず、語られないものをどのように扱うのか、という問題が生じてくる。歴史叙述に着目することで、歴史と文学の境界はゆらいできた。本報告では、青来有一の『爆心』に収録された「虫」を手掛かりに、歴史的出来事の空白への接近の可能性を検討した。

「虫」は、カトリック教徒であり被爆体験を持つ「わたし」が、思いを寄せ、不倫関係を持った「佐々木さん」を思い返すという内容の短編で、その中には、多様な虫のイメージがちりばめられている。登場する虫は、ウマオイを中心に蟻、サナダムシ、蠅、ジヨロウグモ……と様々で、中でもウマオイは多義的に描かれる。虫は、信仰から排除されると同時

に信仰を持たないものの象徴として描かれ、「わたし」の目線は、人の世界から排除された虫に向けられる。

一方で、原爆被害の歴史的な記録、体験記などの中で虫がどのように語られているかを見てみると、例えば『広島原爆被災誌』においては、昆虫類の中ではハエやウジ、蚊への言及が最も多い。「人間の被害を語る」という枠組みの中で、虫については、人の被害を強調する、あるいは「害虫」という定型化した語りとなっているということが指摘できる。言い換えれば、人間を中心とした原爆被害の歴史において、虫の被害は語られないものとなっている。

歴史は「起こったこと」を基軸とするがゆえに、記録に残らないものを描くことには、限界がある。小説「虫」も、基本的には「わたし」という人間を中心とした物語だが、起こったことから自由になる「ありえない話」という形で、歴史的な記録の中には見られない、虫をめぐる様々な語り方が提示されている。このような記述スタイルは、歴史記述とは異なる形で空白の周縁を描く可能性を示しているのではないだろうか。

彙報

第五九回 原爆文学研究会

○日時 二〇一九年七月二七日(土)、二八日(日)

○会場 広島大学東千田キャンパス

【一日目】

○研究発表

原民喜『原爆以後』再考察——「鎮魂歌」を中心に——

遠田 憲成

○セッション「TVドキュメンタリーと原爆小頭症」

東 琢磨・大牟田 聡・平尾 直政

【二日目】

○研究発表

被爆した南方特別留学生と戦後の日本社会

——その記憶の形成の史的展開について——

平野 裕次

“Unspeakable Thoughts Unspoken”を描くこと

——『父と暮せば』と『ピラヴド』に見る「近代的生」——小林 朋子

○「原爆文学」再読7——青来有一『爆心』

楠田 剛士・畑中 佳恵・四條 知恵

編集後記

第五九回の研究会では、記憶の「作品」化や継承、また空白の歴史にいかに向かおうかといった記憶にまつわる論点が多く提起されたように感じました。さまざまな場面でさまざまな記憶の風化が叫ばれる昨今、まだまだ考えるべきことが多い論点であるように思います。

さて、今回の第六〇回原爆文学研究会は十二月二一日(土)に、九州大学西新プラザ大会議室にて開催されます。後山剛毅さん、中野和典さんの研究発表、松永京子さんの新刊『北米先住民作家と〈核文学〉』の合評会を予定しております。皆様のご参加を、心よりお待ちしております。

(加島 正浩)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四—〇一八〇 福岡市城南区七隈八—一九—一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>